

協働実践研究会 KL 活動報告

活動形態：

現在 KL 支部の活動は、メーリングリストにて、情報のやり取りをするという形が主です。例えば、①日ごろのメールなどの意見交換の際や研究会で聞かれた現場の問題に関する参考文献の提示、②KL 支部会員の所属大学で開催される学会の情報（発表募集や参加の呼びかけ）、③次回の KL 支部研究会、ワークショップのプログラム打ち合わせ、④年度ごとのワークショップ運営委員の任命などです。

そのような中、2015 年 3 月 7-8 日（土・日）に国際交流基金 KL とマラヤ大学共催によるマレーシア日本語教育セミナー「授業に ICT を取り入れよう」があり、セミナー終了後、マラヤ大学で研究会を行いました。

2015 年 3 月 8 日（日）マレーシア KL 支部第 4 回研究会：

第 3 回の研究会は、KL セミナー & ワークショップとして行いましたので、今回は 1 年ぶりの勉強会の形でした。

第 4 回 2015 年 3 月 8 日（日）参加者：

大学教員 2 名、予備教育教員 1 名（計 3 名）

場所：マラヤ大学（1300-1600）

今回の研究会は、2015 年 2 月 21 日（土）の第 8 回協働実践研究会（於早稲田大学）で行われた発表を議論するという進め方でした。特に、議論したのは、「私たちの現場の問題をどう捉えるか - 多様な視点を共有する『滝』ワークショップの報告 - 」でした。

・実施方法：

3 月はじめに来馬されていた鳥取大学池田先生にご協力いただき、2 月 21 日当日のレジメと複数の方の発表資料を入手しました。それらの資料を概観し、参加の 3 名にとって興味があり、報告者本人でない第 3 者だけでも議論しやすいようにまとまっていた上記の報告に対して、議論しました。報告者本人のいない議論でしたが、次のような点でうまくいったと考察します。

・「『滝』ワークショップ報告」との協奏：

KL 支部会員の日ごろのやり取りで出てくるのは、やはり「それぞれの現場の問題」です。それで、参加者 3 名は「『滝』ワークショップ報告」に興味があったというわけです。

「滝」の発表者とはもちろん、参加の 3 名も現場が異なりましたが、この報告を議論するとき、自分たちに実際起こっている現場の事例に置き換えながらの議論がありました。問題を自分たちに引きつけることで、まず「『滝』ワークショップ報告」への議論にリアリティが生まれました。

その結果、「『滝』ワークショップ報告」への議論を超えて、互いの感じている問題にコメントしあうことができました。つまり、現場や実践が違って、自分たちの問題を共有しあえることが確認できました。これは、同じ実践を行うことができないことから、実践研究の意味を疑問視する声に対しての一つの反論になるのではないのでしょうか。さらに、この研究会での学びと他のセミナーとの協奏もありました。

・マレーシア日本語教育セミナーとの協奏

午前中のマレーシア日本語教育セミナーは、「授業に ICT を取り入れよう」というテーマでした。その学びを踏まえ、この「『滝』ワークショップ報告」の要領に ICT を使い、教師が自分たちの仕事や授業での問題を開示し、共有することができるとい

う意見がでました。

ICT はなにも教師が学生のために使うためだけにあるわけではないということです。教師間で授業や問題を開示し、さらに共有することで議論し、解決の方向へ向けたらいいということです。この意味でも、「研究会活動は、個人の授業をよくするためだけにあるのではなく、それぞれの現場に働きかけ、職場をよくするためにある」ととらえていいと感じた第4回研究会でした。

文責：木村かおり（マラヤ大学言語学部講師）



マラヤ大学言語学部セミナー会場のイメージ